

被災地を結ぶ、伝える活動

# 伝承ロード 縁

## 測候所改修、震災被害伝える 八戸市みなと体験学習館

「相馬市伝承鎮魂祈念館」震災語り部の五十嵐さん  
福島県立ふたば未来学園高等学校  
全通した三陸沿岸道路  
一関市・祭時災害遺構  
宮古市「シートピアなあと」「宮古うみねこ丸」  
石巻川開き祭り





グレットタワーみなとから見下ろした  
八戸市みなと体験学習館

# 測候所改修、震災被害伝える

## 八戸市みなと体験学習館（愛称・みなつ知）

八戸港を眼下に望む館鼻公園の一角にある「八戸市みなと体験学習館（愛称・みなつ知）」は、今年7月に開館4年目を迎えました。気象庁の旧八戸測候所を改修した施設で、地域の歴史紹介や東日本大震災の被害を伝える学習の場です。震災伝承施設の第3分類に登録されています。

館鼻公園はJR八戸線・陸奥湊駅の北西に位置する小高い丘の上に広がります。古くは日和山と呼ばれ、船の運航に大切な役割を果たしてきました。園内には八戸市の四方を見渡せる「グレットタワーみなと」（高さ24・2m）があり、八戸のシンボルの存在です。

この地にあった2階建ての旧八戸測候所は築30年弱で、新たな活用を検討していた矢先に震災が発生。これをきっかけに、津波被害を伝え、防災を学習する場とともに、地域の歴史と文化を紹介する施設に改修しエレベーターも設け、2019年7月に八戸市みなと体験学習館として開館しました。

延べ床面積は約900平方メートルと大きな施設ではありませんが、さまざまな展示をコン

パクトに分かりやすく紹介しているのが特徴です。1階受付から入つてすぐの「震災タイムトンネル」は通路を活用し、照明を落とした空間で、震災による大規模な災害の様子を映像と音響で紹介。震災がいかに深刻な被害だったのか目と耳で体感できる内容です。

### 防災用品コーナーも

トンネルを抜けた先にある「津波アーカイブ」では時系列で主な出来事をパネルで説明。震災時に八戸市は八戸港などが津波に襲われ、湾岸地区に甚大な被害を受けました。発生翌日午前0時時点で避難所69カ所に計9257人が避難し、電気も復旧しない中、不安な夜を過ごしたことが分かります。

ユニークなのは防災用品の展示コーナー。折りたたみ式ヘルメット、マイクロファイバー毛布のほか、非常持ち出し袋に収納されている携帯トイレセット、軍手とタオルの圧縮セットなど、普段目にする機会のないグッズが並び、備えの重要性を訴えています。

2階にはさまざまな防災食を紹介するコーナーもあり、併設されたカフェで味わえます。実際に被災した時は防災食をリアルに体験することになります。缶パンや温めなくてもおいしいレトルトのカレー、シチューなどがあるので、来館したらぜひ味わってみてはいかがでしょうか。

開館は午前9時～午後7時（7、8月は午後9時まで）。月曜と年末年始は休館です。入館無料。連絡先0178（38）0385。



# 「津波てんでに」広めたい

## 八戸市みなと体験学習館長の前澤さん

「この体験学習館がある館鼻公園は海拔27<sup>メートル</sup>。新井田川の河口から50<sup>メートル</sup>くらいしか離れていない。この付近は昔、多くの漁師が生活していた地域。津波があれば、みんなここに避難して来た」

こう語るのは開館時から館長を務める前澤時廣さん(70)。体験学習館がある湊町地域の出身で、子どもの頃から地元の栄枯盛衰を見てきました。体験学習館の2階には高さ2・

6<sup>メートル</sup>、幅13<sup>メートル</sup>のワイドスクリーンで八戸の歴史や四季を映像で紹介する「湊ワイドスコープ」や、昭和30年代の地元の風景を再現したミニジオラマの展示があり、郷愁を誘います。館長就任までは7期にわたり市議会議員として市勢発展に関わり、副議長にも就任しました。

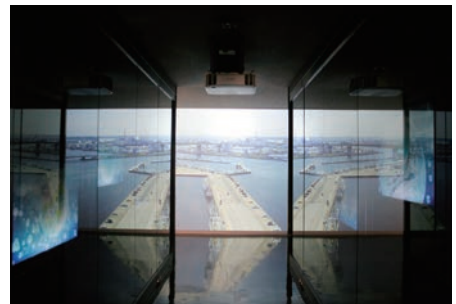
東日本大震災で八戸市は死者、行方不明者各1人。青森県全体でも死者、行方不明者

計4人と震源地から遠かったこともあり、宮城、岩手、福島との3県と比べて人的被害は少なく済みました。被害額は県全体で1300億円を超え、このうち1200億円が八戸市分。船舶や沿岸部の工場、港湾インフラの被害が集中しました。

八戸市は何度も津波に泣かされてきた歴史があります。「近代観測以降だと明治三陸地震津波で青森県は死者345人を数えました。1960年のチリ地震津波の時、私は小学3年生でしたが、被災して津波の怖さを学んだ」と前澤さん。だからこそ防災学習の場を兼ねた施設として体験学習館がオープンしたことに大きな意義を感じています。

### 物心両面の準備大切

「八戸市内の多くの小中学校が校外学習で当館に訪れます。その際、私が子どもたちに必ず伝えるのは、震災の恐ろしさを学んでほしい、そして見



通路の暗い空間を活用した「震災タイムトンネル」

て学んだことを家族に話してほしい、ということですよ」

八戸市は海岸線は長いが高台や内陸に住む市民で、津波は関係ないと思っている人がいっぱいいる。津波の時、どこに住んでいるかではなく、どこにいるかが問題。まずは普段からの物心両面の準備が大切」前澤さんは「津波てんでに」(※)と同様の意味で、古くから八戸地方で語り継がれている「津波てんでに」の言葉と思想が、もっと広がることに期待を寄せます。

前澤さんは体験学習館で語り部としても活動しています。他の職員も展示解説をしてくれます。体験学習館のある館鼻公園はもともと避難場所でした。



バラエティー豊かな防災食を展示するコーナー

一昨年3月、正式に避難所に指定され、館内に備蓄品などを用意しています。一方で先頃発表された日本海溝で巨大地震が発生した場合、八戸市では最大26・1<sup>メートル</sup>の津波が予測され、予断の許さない状況です。

館鼻公園には「地震海鳴りほら津浪」と刻まれた、昭和三陸地震津波の石碑があります。「こうした教訓を忘れないことが何より大切。語り伝えるのはもちろん、目に見えて分かることが理解を深めやすい。当館もそうした施設を目指しています」と強調します。※「津波の時家族はらばらでいいから、高所に避難するなど、まずは自分の身を守れ」という意味



八戸市では数少ない語り部としても活動する前澤さん

思いを  
《発信》

# 震災の教訓を次世代へ伝承

「相馬市伝承鎮魂祈念館」震災語り部の五十嵐さん



震災前の原釜・尾浜地区の町並みを再現したジオラマで、自宅があった場所を覚えてくれた五十嵐さん

相馬市の沿岸部にある「相馬市伝承鎮魂祈念館」は、東日本大震災以前の風景を後世に伝えようと、来訪者の交流の場となるべく開設されました。同館を拠点に震災語り部として活動する女性がいいます。自らも津波に巻き込まれ、九死に一生を得た経験から「自分の命は自分で守って」と震災の教訓を訴え続けています。

語り部を務めるのは五十嵐ひで子さん(74)。相馬市の原釜尾浜海水浴場の近くで長年民宿を営んできました。「あの日激しい揺れの後、しばらくした叔父の手を引いて外に出る

と、目の前に津波が迫って来ました。3人で近くの木に登りましたが、そのまま波に飲まれ、再び夫と叔父に会うことはありませんでした」

水中で意識を失った五十嵐さんは、がれきの中で目を覚まし、必死ではい出したところを発見され、九死に一生を得ました。「あの時、早く逃げれば夫も叔父も助かったかもしれない」。後悔の思いにさいなまれる日々を過ごしました。

震災から半年たった頃、市から「身障者訪問チェック員」の仕事を紹介されました。仮設住宅で暮らす障害者や高齢者宅を訪問し、話し相手になる仕事です。

「皆さんと昔の思い出話や被災体験を話すうち、徐々に気持ちがほぐれてきました。夫は波に流される時、私の名前を何度も呼んでくれた。それは「おまえは助かって人の役に立て」というメッセージだと考

えるようになりました」

## 地元の小学校で語り部

2012年の秋から語り部活動を始めた五十嵐さん。相馬市観光協会を介して依頼を受け、教育旅行や復興状況の視察などで祈念館を訪れた団体や個人に向けて自らの経験を伝えました。

「津波の映像を見ると当時のことが思い出され、初めは全く話せませんでした」と振り返ります。ある時、高校生に向けて語り部をした後、女子生徒がやって来て「話をしてくれてありがとう。ございました」と涙を浮かべてくれたことがありました。

「自分が精いっぱい話したことが伝わったと実感するとともに、若い世代の皆さんに、あの日起きたことを伝承していかなければとの思いを強くしました」

一昨年には相馬市の中村第



祈念館の敷地に立つ慰霊碑。五十嵐さんの夫と叔父の名前も刻まれています

二小学校に招かれ、語り部を行いました。同校に通う孫娘の絆さんが、五十嵐さんの活動を学校に紹介したことがきっかけでした。

「子どもたちには『自分の命は自分で守ってね。一度逃げたら絶対に戻らないで』と伝えました。地震が起きたらどのように行動すればいいのか、家族や身近な人と話し合ってもらうことで、震災の教訓を後世までつないでいってほしい。私も体が元気なうちは語り部を続けます」と、今後の活動の決意を新たにしています。



# 被災地の現状知り課題探究

## 福島県立ふたば未来学園高等学校

東日本大震災と原発事故の複合災害に見舞われた福島県広野町に、震災後の2015年、福島県立ふたば未来学園高等学校(郡司完校長が開校しました。同校では「原子力災害からの復興」を軸に、地域の課題を発見し解決に向けて取り組むカリキュラムを設置。生徒たちが真剣に課題と向き合っています。

かつて福島県浜通りの双葉郡にあった五つの高校は震災により生徒募集が停止されました。ふたば未来学園はそれらの伝統を受け継ぐ双葉郡唯一の高校であり県立の中高一貫校です。

同校には原子力災害を経験した双葉郡が抱える課題を掘り起こし、解決に向けて生徒が主体となったプロジェクトに取り組む「未来創造探究」という特色あるカリキュラムがあります。

1年次に原発事故の影響を受けた双葉、大熊、富岡、川内など双葉郡8町村を巡り、震災遺構を見学したり住民の話をじかに聞いたりして、被災

地の現状を知り地域が抱える課題について掘り起こします。

2年生になると、原子力防災や再生可能エネルギーなど六つの探究分野からゼミ一つを選択。各ゼミに分かれて具体的なプロジェクトを各自が設定し、実践します。

### 地域協働で人材育成

原子力防災ゼミで3年生のおおたそら大和田蒼空さんと三村咲綾さんが取り組むテーマは「過去か



防災訓練のワークショップを企画した左から三村さん、大和田さん、高野教諭

ら今の防災へ」。

6月に行われた防災訓練の後、自ら企画してワークショップを開催。さまざまな状況を想定し災害時に取るべき行動について、全校生徒に考えてもらう機会をつくりました。

「事前にアンケートを行ったところ、生徒の防災意識が薄れていることが分かりました。原発事故についても、よく知らない」と回答する生徒がいたことに危機感を覚えました。震災の風化を防ぎ、語り継ぐためにも、学校で行う訓練の在り方をもう一度見直した方がいいと考えました」と大和田さんはきつかけを話します。

生徒の学びをサポートする心強い味方が「双葉みらいラボ」(別名「地域協働スペース」)。地元の住民や企業、大学教員といったさまざまな人が自由に集い、生徒が取り組むプロジェクトの実現に向けて後押しをしています。

「双葉郡唯一の高校として地域の力をお借りしながら、将来原子力災害からの復興を担える人材、震災を語り継げる人材が、この学校から生まれることを期待しています」と未来創造探究を担当する高野寛之教諭は話します。



原子力防災ゼミの3年生。各自が見つけた地域課題の解決に向け、活発に意見が交わされる

リアス海岸に未来を運ぶ

# 全通した三陸沿岸道路

(仙台市宮城野区～八戸市 359キ)

東日本大震災で甚大な津波の被害を受けた太平洋沿岸地域に計画された高規格道路「三陸沿岸道路(三陸道)」が昨年12月、仙台市宮城野区(仙台港北インターチェンジ)から八戸市(東北自動車道八戸線・八戸ジャンクション)まで全通しました。総延長359キ<sup>ロ</sup>で、震災からの復興道路としての位置付けと、かつて「陸の孤島」と呼ばれ、高速交通体系から外れていた三陸沿岸と各方面を短時間で結ぶ道路として、大きな役割が期待されています。三陸道の建設、維持管理に取り組んでいる国土交通省東北地方整備局の三つの国道事務所に、建設時の苦労や今後の整備、沿線の見どころなどを伺いました。沿線には震災伝承施設が点在しています。ぜひ三陸道を利用して巡ってみてはいかがでしょうか。

## 復興象徴 気仙沼湾横断橋

仙台河川国道事務所(仙台市太白区)

復興のリーディングプロジェクトとして整備が進められた三陸道は、東日本大震災から10年となる昨年3月、宮城県内126キ<sup>ロ</sup>が開通しました。震災以降に開通した登米東インターチェンジ(IC)以北の宮城県内区間の施工を担当したのが仙台河川国道事務所(仙台市太白区)。将来、再び津波災害が起こっても道路を寸断させることなく交通機

能を確保できるよう、震災の津波浸水区域を回避するルートを設定しました。

また、災害時は三陸道が地域住民の避難場所となるよう19カ所宮城県内分の避難階段を設置するなど、いざというときに命を守る機能を重視しました。

## 計画段階から住民と意見交換

区間の中で三陸復興のシンボルともいえるのが、気仙沼湾をまたぐ全長1344メートルの「気仙沼湾横断橋(愛称・かなえおおはし)」。従来の基準では対応しきれない東日本大震災級の自然災害にも耐えられる「災害に強い構造」を実現しました。ルートはもちろんデザイナーや色彩、気仙沼湾を運航する船舶への影響に配慮した安全対策まで、計画段階から地域住民と積極的に意見を交換し

ました。

## 関係者で戦略会議

例えば橋脚が気仙沼湾を通過する船や周りの道路、養殖場の障害にならないのはもちろん、安全性やコスト面、将来の維持管理などにも配慮。海上部は2本の主塔とケーブルで支える「斜張橋」と呼ばれる形式を採用しています。

工事中も船舶やフェリーの安全な往来はもちろん、水質汚濁の防止にも細心の注意を払いました。



気嵐(けあらし)がうっすらと漂い幻想的な早朝の気仙沼湾横断橋(写真提供:仙台河川国道事務所)

多くの住民の期待を背負って完成した気仙沼湾横断橋は夜間、気仙沼市によるライトアップが行われ、橋自体が観光名所の一つにもなっています。

宮城県内全線開通から1年半。仙台、気仙沼両市の移動時間は1時間短縮されました。定時性、走行安定性、輸送力向上などにより沿線ではIC5<sup>キ</sup>圏内を中心に企業立地が進み、水産業、農業といった1次産業の復興はもちろん、観光入り込み数も上昇。観光地の平均滞在時間も延び、サ-



### 震災伝承施設 第3分類

#### 青森

- 1 八戸市みなと体験学習館

#### 岩手

- 2 津波遺構たろう観光ホテル
- 3 たろう潮里ステーション
- 4 宮古市市民交流センター 防災プラザ
- 5 田老防潮堤
- 6 震災メモリアルパーク中の浜
- 7 大船渡市立博物館
- 8 久慈地下水族科学館 もぐらんぴあ
- 9 3.11東日本大震災 遠野市後方支援資料館
- 10 釜石祈りのパーク
- 11 いのちをつなぐ未来館
- 12 大槌町文化交流センター おしやっち
- 13 震災遺構構戸海岸防潮堤
- 14 鳥越ふれあい公園
- 15 羅賀ふれあい公園
- 16 東日本大震災津波伝承館 (愛称:いわてTSUNAMIメモリアル)
- 17 高田松原津波復興祈念公園
- 18 野田村復興展示室
- 19 山田町まちなか交流センター

#### 宮城

- 20 東日本大震災 学習・資料室
- 21 せんたい3.11メモリアル交流館
- 22 震災遺構 仙台市立荒浜小学校
- 23 石巻ニューゼ
- 24 伝承交流施設 MEET門脇
- 25 東日本大震災メモリアル南浜 つなぐ館
- 26 唐桑半島ビジターセンター・津波体験館 (2022年6月27日から休館中)
- 27 リアス・アーク美術館 「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示
- 28 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館
- 29 津波復興祈念資料館 関上の記憶
- 30 岩沼市 千年希望の丘交流センター
- 31 東松島市 東日本大震災復興祈念公園
- 32 高野会館
- 33 名取市震災メモリアル公園
- 34 塩竈市津波防災センター
- 35 石田沢防災センター
- 36 NHK仙台放送局
- 37 山元町防災拠点・山下地域交流センター (1階 防災情報コーナー)
- 38 山元町震災遺構 中浜小学校
- 39 中浜小学校震災モニュメント 「3月11日の日時計」
- 40 名取市震災復興伝承館
- 41 気仙沼市復興祈念公園
- 42 石巻南浜津波復興祈念公園
- 43 石巻市震災遺構大川小学校
- 44 海の見える命の森
- 45 東日本大震災慰霊碑 (日和幼稚園被災園児慰霊碑)
- 46 石巻市震災遺構門脇小学校
- 47 がんばろう!石巻看板

※2022年8月1日現在

ビスエリアやパーキングエリアがない代わり、沿線に続々と新設された道の駅などの観光施設も盛況です。

昨年6月には国、県、宮城県内の沿線自治体で三陸道の利活用に関する戦略会議を立ち上げました。三陸道を地域活性化の起爆剤とし、三陸沿岸エリア全体としてのさらなる地域活性化につなげる取り組みに期待が寄せられています。



気仙沼産折インターチェンジ付近は山の切り通しやトンネルが続く (写真提供:仙台河川国道事務所)

## 特有の地理的条件を常に念頭

東日本大震災からの早期復興リーディングプロジェクトとして整備を行ってきた復興道路・復興支援道路について、適切な道路維持・管理を行うため、南三陸沿岸国道事務所

## 未来へつなぐ橋とトンネル

南三陸沿岸国道事務所(釜石市)

(釜石市)が昨年4月に新設されました。

管理区間は三陸道が鳴瀬奥松島〜山田南IC間の17.5キロ、釜石自動車道の釜石ジャンクション〜東和IC間の67キロ、国道45号の岩手県境〜大槌町間の81キロ。自動車専用道路の直轄管理延長としては全国で一番長い距離を担当しています。



三陸道と釜石道が接続する釜石ジャンクション (写真提供:南三陸沿岸国道事務所)

現在の三陸道の管理区間では、1993年3月に当時の



釜石市中心部に接続する釜石中央インターチェンジ  
(写真提供:南三陸沿岸国道事務所)

大船渡市と三陸町を分ける峠で、交通の難所でもあった新三陸トンネル(2226メートル)と三陸IC側の道路がいち早く開通。その後、大船渡ICと同トンネルの間も開通し、2005年3月に大船渡三陸道路(17・3キロ)が全通するなど、国道45号のバイパスとして機能しました。

復興道路の整備に当たっては2012年4月に設置された前身の南三陸国道事務所、岩手県内の三陸道のうち唐桑高田道路(岩手県側)と釜石山田道路の整備を行いました。

三陸道は津波浸水区域を回避するルートを選定しているため、リアス海岸と北上山地に挟まれた山間地域の地形が急峻な箇所を通過しているため、橋とトンネルなどの構造物が連続し、工事の進捗

にも影響を及ぼしました。また、震災の復興工事が行われている時期でもあり、資材の需要と供給のバランスが崩れるのではという懸念も。14年9月には三陸道専用の生コンクリートのプラントが稼働し、安定供給を図りました。

完成後の構造物の維持管理が大変と見通し、コンクリートの長寿命化にこだわるなど、未来を見据えて取り組みました。

### 広域迂回路の役割も

三陸道が全線開通したこと、東北道での通行止めが発生した際には、釜石自動車道を経由して三陸道が広域迂回路として利用されるようになりました。

三陸沿岸は養殖が盛んな地域であり、最近では養殖サーモンを空輸してその日のうちに販売する取り組みも始まり、販路拡大が期待されます。

現在は橋やトンネル以外の2車線の分離帯にワイヤロープ式防護柵を設ける工事が一段落し、ハーフICの歌津北ICを気仙沼方面からも乗り降りできる事業に着手しています。今年10月には道の駅「さんさん南三陸」(南三陸町)が

オープンする予定で、同事務所では三陸道にも案内看板を設置し、三陸道利用者の休憩施設はもとより、沿線の活性化につなげていけるよう取り組んでいます。

三陸道の沿岸区間では津波避難階段が設置されています。平野部はのり面を階段で上がり道路部分へ、山間部はトンネルの脇を階段で上がりトンネルの上へつながります。地域住民の避難訓練も行われています。

## 難所克服し「命の道」整備

### 三陸国道事務所(宮古市)

三陸国道事務所(宮古市)は三陸道の山田南へ階上IC間139・4キロを管理し、盛岡市と宮古市を結ぶ宮古盛岡横断道路の建設事業などを担当しています。

東日本大震災で沿線地域は甚大な被害を受けましたが、三陸道は「復興道路」「命の道」として段階的に整備が進められ、最後の普及へ久慈間25キロが昨年12月に供用を開始し、事業

## 工事の難所「思惟花笑み大橋」

下安家大橋を西側から望む。海側には三陸鉄道の車両が走る(写真提供:三陸国道事務所)



394メートル)。田野畑村道と松前川を跨ぐ急峻なV字型の谷間に国道45号の思惟花笑み大橋に並行して架けられています。

ここは「辞職坂」と呼ばれるかつて交通の難所のあったところで、松前川から道路までの高さは約130メートルもあり、風が強く、やませの霧に覆われる地域でもあり、時には隣の柱が見えないほど。クレール作業泣かせで建設当時は工程管理に苦労したそうです。

コンクリートの柱を下から徐々に作り上げ、左右のバランスを取りながら橋桁を張り出していきました。生コンクリートの圧送距離が長いことから、良質な構造物となるよう工夫もしています。

### さらなる利便性向上へ

全線開通後は、利便性を向上させる事業に取り組んでいます。ハーフICで、現在は仙台方面からの乗り降りのみの山田北ICと、八戸方面からの乗り降りのみの洋野種市ICのフル化を進めています。

また、久慈市の久慈北IC近くでは道の駅「いわて北三陸」が来年4月に完成する予定で整備を進めているほか、山田町の山田IC近くには、少し



柱の高さ93メートルの思惟花笑み大橋。奥が並行する国道45号思惟大橋(写真提供:三陸国道事務所)

離れた場所にある道の駅「やまだ」を移転するための整備を来年7月の完成を目標に進めています。

三陸道の全線開通では時間短縮の効果だけでなく、他地域との往来も活発になり、人の交流拡大が期待されます。今年4月には仙台と宮古を結ぶ三陸高速バスの本格運行が始まり、1日2往復走っています。同じ岩手県内で三陸沿岸の久慈市と宮古市も、所要時間が約1時間となったことから、今では気軽に行き来できるようになりました。

同事務所管内は震災伝承施設が点在し、風光明媚な三陸ジオパークのエリアでもあります。ぜひ三陸道を利用して訪れてみてはいかがでしょうか。



記憶を残す  
明日のために

# 内陸地震の象徴スポット

## 一関市・祭時災害遺構

内陸直下型の大地震も時に甚大な被害を及ぼします。2008年6月14日の岩手・宮城内陸地震では震源域の栗駒山一帯で地滑りや斜面の崩落などが発生。秋田方面に通じる一関市せんとりょう蔵美町の国道342号の祭時大橋が落橋し、その無残な姿はこの地震の象徴的存在となりました。新しい橋が完成し今年で12年を迎えますが、付近には災害遺構「祭時被災地展望の丘」が設置され、今も被害のすさまじさを垣間見られます。



岩手・宮城内陸地震で落橋した旧祭時大橋が今も残る

岩手・宮城内陸地震は祭時大橋の北側を震源にマグニチュード7.2を記録し、奥州市と栗原市で最大震度6強を観測しました。祭時地区の地震計では最大加速度4022ガルを記録。地震時に観測された地表最大加速度の世界記録としてギネスブックの認定を受けています。

祭時大橋は1978年完成で、長さ94.9m、幅9.5mで、激しい地震の揺れで橋脚の基礎としていた岩盤が大きく滑り落橋しました。

被災した橋の北側100mほどの場所に建設した長さ94.1mの仮橋を含む、全体の長さ558.4m、幅5.5mの仮設道路が地震発生から5カ月後の11月に通行開始。09年には新しい橋の本格的な工事が始まり、まずは下部工、10年初頭には上部工に着手。計画から3カ月早い10年12月に完成しました。



険しい渓谷に架かる今の祭時大橋

新しい橋は旧橋の北側150mほどの場所に、長さ115.5m、幅9.5mの「2径間連続Tラーメン橋桁橋」という形式で、橋脚の基礎から橋面まで約40mの高さ。橋の周辺の道路も新たに整備され、全体の長さは556.9mとなりました。

### 被災した橋が残る

新しい橋の東側には災害遺構「祭時被災地展望の丘」が設置され、東屋や案内看板のほか、撤去した橋桁の一部を展示しています。被災した橋が現地に残り、展望の丘からは新旧どちらの橋も望めます。

橋の西側には被災した旧道や旧橋を間近で見学できる「祭時災害遺構見学通路」があります。長さ約100mの柵付きの木道で、脇には地割れでこぼこになった旧道のアス



見学通路沿いにある被災した状態のままの旧道

ファルト路面が並行しています。通路の先端からは旧橋の激しい段差や起伏を望め、当時の被害の深刻さを窺えます。祭時災害遺構を維持・管理する一関市道路管理課は「内陸地震の甚大な被害の一端を見られます。近隣の小中学生が授業の一環として今でも訪れています。防災や減災の学びとして、また内陸地震の伝承の面でも足を運んでほしい」と話しています。



# 目玉企画で集客誘う 海から浄土ヶ浜観光

## 宮古市「シートピアなあと」「宮古うみねこ丸」

東日本大震災の津波で被災した宮古市の出崎地区に、従来からあった「道の駅・みなとオアシスみやこ」「シートピアなあと」に加え、今年4月には「しおかぜ公園」がオープン。7月には新たに運航を始めた遊覧船の発着場所になるなど、これまで以上に観光エリアとしてにぎわいが増しそうです。震災からの観光復興の拠点としても期待されます。



宮古市街地の観光拠点「道の駅・みなとオアシスみやこ」[シートピアなあと]

シートピアなあとは、宮古市の観光物産の拠点施設として2003年5月にオープンしました。施設は市が設置し、第三セクターの宮古地区産業振興公社が管理・運営を行っています。震災では高さ3メートル余りの津波に襲われ、2階建ての施設の1階部分が被災。復旧工事を経て13年7月に営業再開しました。

「あそこに行けば面白いものがある、行くたびに変化がある、と思っただけのような施設運営を心掛けています」と話します。

7月に運航を始めた宮古市遊覧船「宮古うみねこ丸」は出崎埠頭を発着します。遊覧船は新造で全長18・8メートル、総トン数19ト、乗客定員80人。ふるさと納税やクラウドファンディングも活用し、みんなの



「隣接の浄土ヶ浜を含めた地域全体の振興策を考えていきたい」と佐藤社長。新たな飛躍が期待されるこの地を拠点に、宮古市内の震災伝承施設を巡ってみては。

連絡先はシートピアなあと 0193(71)3100。

### 遊覧船が運航開始

新しい船の運航を受託する岩手県北自動車のアンバサダー八重樫真さん(59)は「宮古

### 宮古市の震災伝承施設

- 津波遺構たろう観光ホテル 宮古市田老字野原80-1
- たろう潮里ステーション 宮古市田老2-5-1
- 宮古市市民交流センター 防災プラザ 宮古市宮町1-1-30
- 田老防潮堤 宮古市田老字川向 地内
- 震災メモリアルパーク中の浜 宮古市崎山第3地割123

※第3分類(訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設)のみ掲載

津波の被害を乗り越えた先にコロナ禍がありました。次々と目玉企画を打ち出し集客につなげています。最近ではレストランで井飯の上に海の幸がたっぷり載った「なあ井」(2800円)を毎日50食限定で提供しています。

「出崎発は初便が午前9時00分、最終便午後4時10分の1日7便。火曜運休。料金は大人1500円、小学生750円。」

の観光を次世代に受け継いでもらえるよう、震災のことも含め自分たちが培った知識を余すことなく伝えていきたい」と決意を新たにしています。

連絡先は岩手県北自動車 宮古遊覧船事業部 0193(65)8856。



宮古の海の幸がたっぷり載った「なあ井」



運航を始めた新造の宮古市遊覧船「宮古うみねこ丸」

# 中心市街地に 久々のにぎわい

## 石巻川開き祭り

石巻川開き祭りは仙台藩祖伊達政宗の命で北上川の改修工事を行った川村孫兵衛重吉への報恩感謝で、大正時代に始まった歴史ある祭り。今夏は新型コロナウイルス感染症対策で規模を縮小して開催になったものの、孫兵衛船競漕や小学校鼓笛隊パレード、花火大会などが3年ぶりに復活。多くの来場があり、久々ににぎわいが戻りました。



復興事業で整備された旧北上川の堤防で花火を眺める人々



旧北上川で熱戦が繰り広げられた孫兵衛船競漕の決勝



日頃の練習成果を披露した小学校鼓笛隊パレード

石巻川開き祭りのメイン会場は、石巻湾に注ぐ旧北上川河口付近に位置する石巻市中心市街地。東日本震災では津波が押し寄せ、旧北上川に架かる内海橋は多くのがれきで埋め尽くされ、観光名所や商業施設、住宅は全壊、浸水など大きな被害を受けました。

石巻市は旧北上川沿いに市街地が発展してきた歴史があります。震災後、市は国と連携して水辺空間を生かしたまちづくりを掲げ、旧北上川沿いの地盤を改良し、緩やかな勾配の「プロムナード堤防」を新設。周辺の商業施設や公共施設、マンションとつながる交流空間を整備しました。

中心市街地の工事は震災から10年の昨年に一段落。本来なら石巻川開き祭りに多くの人を呼び込み、復興した姿を伝えるはずでした。しかしコロナ禍のため、神事以外の主要行事は見送りになりました。

### 鎮魂の流灯と花火

第99回の今年は規模を縮小しながらも8月6、7日に開催。初日は市内各所で漁港祭・大漁安全祈願祭、川村孫兵衛翁報恩祭、東日本震災慰霊祭といった神事が執り行われました。旧北上川では孫兵衛船競漕とミニ孫兵衛船競漕の予選レース、七夕の吹き流しが飾られた中心市街地では

「いちおうじのみやみこし一皇子宮神輿や」アケアカーニバル2022」が繰り広げられました。

夜は震災犠牲者を追悼する流灯があり、灯籠が旧北上川を漂い幻想的な雰囲気になりました。花火大会も見どころの一つ。前半30分は「祈り」をテーマに震災の供養花火が行われました。後半1時間は「希望」がテーマ。大小の華やかな花火、台船からスターマインが打ち上げられました。

2日目は旧北上川で孫兵衛船競漕とミニ孫兵衛船競漕の決勝レースを実施。中心市街地では小学校鼓笛隊パレードがあり、旧石巻市内の小学校に通う児童がかわいらしいユニホームに身を包んで演奏しました。エイサーみやこしや縄張神社みやこし、ものうはねこ踊りも陸上パレードを盛り上げ、大漁踊りがフィナーレを飾りました。

事務局を務める石巻商工会議所の中塩真爾さん(30)は「今年には感染症対策に気を配りながら3年ぶりに主要行事ができました。来年は開催100回の節目なので、コロナが落ち着き、より多くの方に前に進んでいる石巻を見ていただきたいです」と願っています。

# (株)熊谷組東北支店の皆さんが「3.11伝承ロード研修会」を行いました

8月23日、(株)熊谷組東北支店では、東日本大震災で同社が果たした震災復興の役割を「学び」、震災遺構を見学し、当時の危機管理対応を知ることによって自然災害時の的確な避難行動など危機管理への「備え」を目的に、3.11伝承ロード研修会を行いました。

東北支店各部署から参加した24名は、自社が手掛けた東日本大震災の災害復旧工事「北上川長面堤防」と伝承施設「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を視察し、震災遺構の「大川小学校」「門脇小学校」「石巻南浜津波復興祈念公園」を見学しました。

今回の研修会を通し、近年、頻発している自然災害において、建設関係従事者としての使命感、防災に対する知識と教訓をより深められたようでした。

時間	見学施設等
09:00	JR仙台駅東口出発
10:30~11:30	石巻市震災遺構 大川小学校
11:40~12:00	北上川長面堤防
12:40~13:30	石巻地区かわまちづくり
13:40~14:50	石巻南浜津波復興祈念公園 (みやぎ東日本大震災津波伝承館)
15:00~16:00	石巻市震災遺構 門脇小学校
17:15	JR仙台駅東口 到着・解散

## 研修会の感想(抜粋)

- 自分自身、当時は東京にいて本当の被害を目の当たりにしていなかった。震災遺構で被災者のお話を伺うことができ、少しでも当時を知る機会があって良かった。自分の子どもにも伝えていきたいと感じた。(30歳代・男性)
- 生まれてからほとんどを宮城で過ごしているが、震災、特に津波については詳しくなかったため、このような機会でもう一度振り返ることができた。また、実際に被災した方(語り部)のお話を聞くと、文字で見るとより分かりやすく、より心に残りました。(20歳代・女性)



石巻市震災遺構 大川小学校



石巻南浜津波復興祈念公園(みやぎ東日本大震災津波伝承館)



北上川長面堤防



石巻市震災遺構 門脇小学校



## 表紙

### 被災地を歩く

## 震災資料500点展示

### リアス・アーク美術館(気仙沼市)

気仙沼市中心部から南西の閑静な丘陵地帯、緑の木立に囲まれた場所にあるのがリアス・アーク美術館だ。隣には気仙沼市総合体育館「ケー・ウエーブ」もあり、同市の生涯学習やスポーツの拠点の一つとなっている。

リアス・アーク美術館は1994年10月の開館。東日本大震災では被災で1年半の休館と修繕工事を経て部分開館し、従来からの地域の歴史・民俗資料と主に東北・北海道の現代美術の紹介のほか、新たに「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示を加え、2013年4月に全面開館した。

美術館でありながら、三陸沿岸の主要都市の学術施設として、震災以前から津波の災害史や文化史の調査研究を行ってきた。「東日本大震災の記録と津波の災害史」では、震災から約2年間の館独自調査記録資料(被災現場写真・被災物)、その

他歴史資料など約500点を展示。第3分類の震災伝承施設として、市内外を問わず多くの児童生徒らが見学に訪れている。

施設の外観は方舟(はこぶね)を表したユニークな形で、現代的なアルミと伝統的な漆喰(しっくい)を用いて建造された。館内も現代的な雰囲気、一部ガラス張り外に飛び出ている展望スペースからは、気仙沼市街地を望める。近未来都市のような施設の装いに、若者たちは将来をどう思い描くのか。震災伝承の担い手として期待がかかる。



所在地  
気仙沼市赤岩牧沢138-5